平成１８年３月１日発行

かまにし

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

第１９号

わがまちの顔

東京実業高等学校　マーチングバンド部

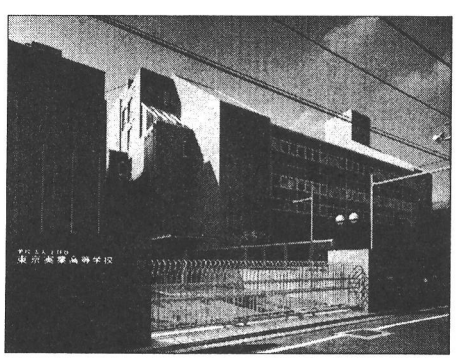
東京実業高等学校は大正11年、神田西小川町に東京実業学校として上野清氏によって創立されました。大正12年、関東大震災に被災し、現在地の西蒲田八丁目18番地に移転してきました。現在は工学系（機械科、電機科）、普通科（文理コース、ビジネスコース）にわかれ、全科とも男女共学で、進学率は約70％で大学と専門学校へ進学しています。

マーチングバンド部の創部は昭和52年で、バンド名はタイガーマーチングバンド、全国各地より入部希望者が集まり、現在、部員総数61名と充実し、横田正明監督の指導のもと寮生活をおくりながら、技術の研鑽に励んでいます。合宿は毎年の定期合宿に加え、大会前の合宿練習をいれると1年に4～5回は行います。

全日本高等学校マーチングバンド・バトントワリング連盟主催の全国大会に創部28年で20回出場、地区大会を勝ち抜いての全国大会出場で、高校野球よりは出場校数は少ないとはいえ、彼らがめざす甲子園と変わりはありません。権威ある全国大会で16回の金賞を受賞、平成元年にはついにグランプリという日本一の栄冠を獲得しました。日本一の名誉を担い、請われてアメリカ・ホワイトハウス前広場で演奏の栄に浴しました。平成3年、アメリカ・ダラスで行われた世界マーチングバンド・バトントワリング大会に日本代表で出場、堂々と5位に入賞。海外遠征もすでに4回も経験し、文化の親善使節として大活躍をしています。

創立当時より、地域や地元の学校と交流をはかり、地元のイベント等にも積極的に参加することを心がけております。一昨年のＪＲ蒲田駅開設百周年記念祭には蒲田西口アーケードのパレードに参加、ひきつづき西口広場にて大勢の区民の前でのコンサート、バトントワリングを披露しました。また大田区体育祭に、あるいは近隣中学校の体育祭等にも出演し、区民と、また地元との親善を深めてきました。

（取材、竹内、山崎委員）



小津安二郎監督と映画「生まれてはみたけれど」

ぼくは「豆腐屋」だから豆腐しかつくらない。
同じ人間が、そんなにいろいろな映画をつくれるものではない。
何でもそろっているデパートの食堂でうまい料理を食べられないようなものだ。
ひとには同じように見えても、ぼく自身はひとつひとつに新しいものを表現して。
新しい興味で作品にとりかかっている。

小津安二郎

日本映画界を代表する巨匠

小津安二郎といえば、黒沢明、溝口健二と並ぶ日本を代表する映画監督の一人です。36年の監督人生で、54本の作品を残しました。そのほとんどが直接的な暴力や、殺人シーンがなく、悪人もほとんど登場しません。日本のごく一般的な家庭の日常生活を飾らずに描いたホームドラマが主です。母と息子、父と娘、夫と妻、そして兄弟…独特の雰囲気は他の映画とは異なり、落ち着いた空間美を感じさせます。生涯にわたり頑固な小津スタイルは不変でした。

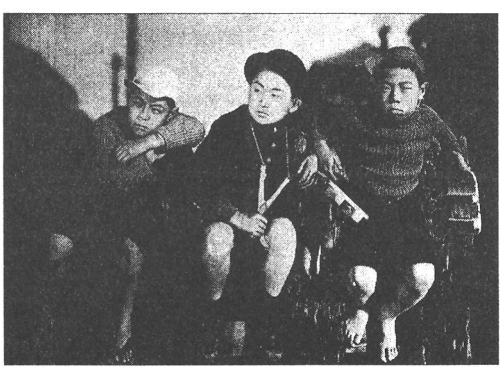
反面、作品の多様性や物語の起伏、抑揚に乏しいと指摘される声もあり、あまりにも日本的な作風が外国人には理解できないと思われ、海外への紹介は黒沢明、溝口健二監督よりも遅れてしまったのです。しかし近年、何の変哲もない日常生活の中での機微や微妙な感情を生き生きと描き出す技法や、絵画的ともいえる不変のショット、不変のテンポ等その手法が、海外でも高く評価され、戦前の代表作「生まれてはみたけれど」(昭和7年)は今では世界各国の映画教育機関においてサイレント映画の代表作として、またアメリカでは授業の教材としても用いられています。

映画「生まれてはみたけれど」

小津安二郎のサイレント映画を代表する作品であると同時に、日本のサイレント映画を代表する作品でもあります。東京郊外の新興住宅地を舞台にサラリーマン世界の悲哀を幼い子ども達の目を通して描いています。

新しく引っ越してきたサラリーマン家庭の兄弟2人が持ち前の腕力と知恵でたちまち近所のガキ大将になります。子ども達のなかには父親の会社の重役の息子もいましたが、彼らはその子も子分として従えてしまいます。

ある日、子供たちの間で誰の父親が一番偉いかという論争がおきます、いろんな珍説が出る中で、兄弟はもちろん、自分たちの父親が一番偉いと信じています。ある夜、重役さんの家で小型映画の上映会があり、兄弟たちも父親とともに上映会に参加します。そこで上映された映画を見て、兄弟はショックを受けます。映画のなかで父親が重役に求められるままに、おどけた格好をする姿が写されていたのです。日頃、家庭では威厳をもつように指図する父親が、そこでは重役にへつらって、言われるままにおどけていました。愕然とした兄弟は上映会を途中に席を立ち、家に帰ってきた父親に猛然と抗議をしました。父親は父親なりの論理で説明しますが、子供たちは納得できるものではありません。そんな子供たちに手を焼いた父親は思わず子供を殴ってしまいます。泣きながら寝てしまった息子たちをみて、父親は自己嫌悪に駆られます。



子供の視点で、大人社会の矛盾を批判する

この映画の前半は子供の無邪気な覇権争いや、奇妙な遊びがコミカルに描かれ、ほのぼのとしたユーモアにあふれ、軽い気持ちで楽しめましたが、後半になると、途端にこうしたシリアスな展開を見せ始めます。

この映画の背景となる昭和7年前後は社会が経済不況にあえぎ、失業者が街にあふれかえっていた時期でもありました。こうした暗い社会状況を考えると、なお一層やり切れなさが増してきます。翌朝も、子供たちにはまだ昨夜の怒りが尾を引いており、朝食をとらないという形で抗議を続けています。そこへ父親がおにぎりをもって現れ、結局、子供たちのやせ我慢もここまでで、空腹に耐え切れず、しぶしぶおにぎりに手を出してしまう。こうして争いに幕が引かれました。

翌朝、父と子はいつものように連れ立って家を出ました。すると間の悪いことに、向こうから重役の乗った車がやって来ます。親子は思わず立ち止まり、いつもだと、ここで父親は相好を崩して元気に挨拶するはずが、昨夜のこともあって、ただ黙って立ち尽くすだけでありました。そんな父親の気持ちを察したかのように息子は父親に声をかけます。「お父ちゃん、専務さんだよ、挨拶しなくちゃだめじゃないか」。

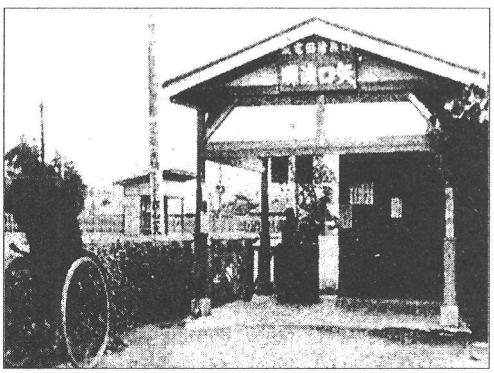
こうしてわれわれの心に、さまざまな波紋を残して映画は終わります。

出演　斉藤達雄、吉川満子、菅原秀雄、突貫小僧、坂本武

矢口渡駅周辺がロケ地

小津安二郎監督は、普段はセット撮影を多用し、あまり野外の撮影は行わない人でした。この映画では新興住宅地が舞台という事で、蒲田撮影所からは近く、しかも、彼の好みでもある、電車をバックに写すことが出来る、ぴたりの条件にあったのが、矢口渡駅周辺でした。

父親が通勤に使う最寄の駅が目蒲線（現多摩川線）矢口渡駅で、子供たちが通う学校は、矢口小学校です。これは、戦前から住んでいる方々であれば、周りの雰囲気で、すぐに気が付くはずです。通学路の撮影中、意図的に映し出された電柱看板に「伊藤産婆」の文字が認められます。当時の原町（現多摩川二丁目）に伊藤産婆は実在していました。一家の住まいである一戸建ての住宅にはソコソコの庭があり、白いペンキ塗りの低い塀の向こうは郊外電車の線路です。お気に入りらしく一両編成の電車（目蒲線）の通過をわざわざ撮影し、通過する電車をバックにして、庭で親子がおにぎりを食べながら仲直りするシーンが、とても印象的でした。



旧矢口渡駅

プロフィール

明治36年12月、父虎之助、母あさえの次男として東京深川に生まれます。家庭の事情で9歳の時に父の郷里である松阪へ転居します。その後、宇治山田中学に入学、卒業後は小学校の代用教員を経て、19歳で上京、叔父のつてで撮影助手として松竹蒲田撮影所に入社。昭和元年、演出部に移り、大久保忠素の助監督となり昭和2年「懺悔の刃」で監督デビューを果たします。

昭和7年「生まれてはみたけれど」でキネマ旬報ベストテンで第1位となり、高い評価を得ました。昭和11年、自身最初のトーキー作品「一人息子」が最後の蒲田撮影所作品となります。太平洋戦争中は、軍報道部映画班として南方へ従軍、外地で数多くのハリウッド映画を見たということです。昭和20年シンガポールで終戦を迎え捕虜生活の後、翌年帰国。昭和22年、「長屋紳士録」で復帰。その後は脚本家、野田高梧と組み、「晩春」「麦秋」「東京物語」といった名作を次々と発表していきます。中流家庭を舞台に人生や生活の機微を描き、独特のローアングルの手法を磨きあげ、いわゆる「小津調」を確立し日本映画界を代表する巨匠と言われる様になります。昭和33年「東京物語」がロンドン国際映画祭でサザーランド賞を受賞したのを機に、海外でも注目をあびるようになり、同年紫綬褒章を受章、翌昭和34年には芸術院賞を受賞し、映画人としては初の芸術院会員になっています。世界レベルで評価が高まるなか、癌に冒され、昭和38年12月12日、60歳の誕生日に逝去、晩年を過ごした北鎌倉の円覚寺に眠っています。

（取材　柏村、滝口、都築委員）

読者投稿

西伊豆

ペンネーム　青田　志乃

この間、一泊旅行をしてきました。行った先は電車がないので、車でしか行けない西伊豆です。連れは、釣りが好きなので若い頃よく行っていたようですが、私は家族が誰も車の免許を持っていなかったので初めてでした。

その日はお天気が良くて、気持ちよく過ごせました。釣りをしている人も沢山いて、遅い時間に行った私達は、釣る場所がないほどです。それにしても、西伊豆は良く釣れますね。一時間程やってみましたが、なんとメジナが釣れたのです。一時間でつれるなんて・・・。連れは久し振りの釣果に満足そうでした。

その後、楽しみにしていた温泉へ。海の見える気持ちの良い露天風呂です。そこから眺める夕日に惚れ込んで、この宿に泊まることにしたのです。

ほんの二年前に泊まった筈ですが、よく憶えていなかったのです。露天風呂までの道のりの険しさを・・・。

それとも若かったのか？歳をとってしまったのか・・・。

（たった二年なのに？）

いずれにしても、下りとは言え、延々続く坂道に途中でバテて、励まされながらの露天風呂到着となりました。

でもそれ程の苦労の甲斐のある露天風呂です。なかなかこんなに海に近いお風呂はないのではないでしょうか？波の音に普段の仕事の疲れも癒され、先程の坂道の事も忘れてくつろぎました。

またいつか、この景色を見たい・・・。と思いながら、あと何年この坂道を登れるのか。体力をつけておかなくては・・・。と、思いました。

初めての読者投稿を掲載しました。原稿は随時募集しておりますので、どうぞ事務局までどんどん投稿してください。

投稿記事募集！

旅の思い出、身近なエピソードなど、原稿をお寄せください。

投稿要項

内容　ジャンルは問いません

文字数　四百字詰原稿用紙1枚
　　または2枚

署名　実名あるいはペンネーム

投稿先　事務局まで

投稿の際は住所、氏名、電話番号を明記してください。

皆様からの投稿を心より、お待ちいたしております。お寄せいただいた原稿は、出来うる限り掲載したいと思っていますが、年に4回という発行回数ですので、掲載出来ないこともあります。今後とも、皆様と共に楽しい紙面づくりをしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，444人
	女	27，119人
	計	56，953人
世帯		29，449世帯

平成18年2月1日現在

編集後記

今回のわがまちの顔では、頑張る若者を取り上げたいと思い、東京実業高校マーチングバンド部を取材しました。日本のみならず海外でも活躍する彼らをどうぞ応援してあげてください。

第18号のトミン多摩川二丁目自治会で原稿を執筆していただいた、宮腰自治会長のお名前が宮越になっておりました。

お詫びの上、訂正いたします。

平成17年12月発行の第18号「わがまちの顔」でご紹介した『老舗サイトー工芸　斉藤勲さん』が平成18年1月に、平成17年6月発行の第16号「わがまちの顔」でご紹介した『ロシアンジプシー占い　リュウ・ミツコさん』が平成17年9月にそれぞれお亡くなりになりました。

ここに謹んでご報告し、ご冥福をお祈りいたします。

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五